

# 近代大阪の漆匠・今村洋渡と「明治天皇御轎車図」

内藤 直子

## はじめに

筆者は平成28年（2016）に企画開催した特別展「近代大阪職人図鑑—ものづくりのものがたり—」の準備過程で、近代大阪の工芸家を網羅的にリストアップした。またそれらの作者の手になる作品につき、所在が確認できたものについては極力紹介を試みた。しかし、作品が見当たらないままに名前と略歴だけが判明したため、展覧会では紹介することが出来なかった人物も多い。その全体像は近いうちに本誌上で公開できるよう集約中であるが、本稿のテーマである今村洋渡もそんな、文字情報しか判明していない人物のひとりであった。洋渡は近代大阪の工芸家の中でもユニークな略歴であり、当時聞き合わせや調査等を重ねたが、残念ながら展覧会オープンまでの間に、展示として紹介するに足る資料の発見には至らず、残念に思っていた。

しかしこのたび、彼が手がけたと記録で散見した明治天皇の「御轎車」の彩色の刷り物が発見された。轎車とは、貴人の葬送の際に棺を載せて運ぶ車のこと。「きぐるま」と読む向きもあるが、本稿では『広辞苑』に従い「じしゃ」と読む。以下この図の紹介を契機とし、今村洋渡の事績についてひもといてみたい。

## 1. 「洋渡」の初二代と、その略歴

洋渡を名乗る人物が、少なくとも初代、二代の2人いたことは、後掲する資料①～④により明らかである。

初代今村洋渡は嘉永元年（1848）に兵庫県神崎郡川辺村（現在の市川町）の医師の家に生まれた。本名は清吉。今村は20代で養子に入った家の姓であり、もとの姓は不明である。幕末の京都で漆芸を学んだ後、今村家に入った。明治22年から足かけ3年に渡り、中国、シンガポール、イラン、インドネシア、オーストラリアを訪れている。洋渡という号は、当時未だ珍しかった長期の洋行に因んだものであるとされることから、この号の使用は明治24年以後と思われる。大正元年には明治天皇の、また大正3年には昭憲皇太后の大喪の儀に際し、轎車の漆塗を手がけた。また、二代洋渡の紹介記事によると、初代洋渡は「紫漆」の発明者だという。大正7年（1918）没。

二代洋渡は本名を大橋健吉という。明治20年（1887）1月6日、香川県琴平町に生まれる。その後「香川県琴平工業学校」の「髹漆科」を卒業したとあるが、該当する学校名は見当たらず、明治31年創立の香川県工芸学校（現在の香川県立高松工芸高等学校）の髹漆科のことと思われる。ともあれ、香川県の学校で髹漆を学んだのち、初代今村洋渡に師事し、大正元年（1912）、同家に入り、明治天皇や昭憲皇太后の轎車の製作には初代と共に携わった。資料②を見ても、初代洋渡の没後も今村洋渡は屋号的に用いていたが、本名としては大橋姓を貫いたようで、多くは大橋洋渡と名乗っていたよう

だ。というのも「戸籍上の事情」により今村姓は使えず、大橋のまま洋渡のみ襲名したという。住所は大阪市西区北堀江であり、広告によると得意領域は「御座敷用品、手道具一式」。比較的大きな対象物の塗りを手がけていた様子がうかがえる<sup>(1)</sup>。そんな二代洋渡は昭和2年(1927)、大正天皇の轎車の塗りに携わるが、その後の足跡は現時点では不明である。昭和9年の大阪府工芸協会会員名簿に彼の名は無く、後継者と思われる名も見当たらない。

## 2. 「明治天皇御轎車図」(個人蔵)について

同図は縦48.0cm×横63.5cmの紙本に刷られた刷り物である。明治天皇の大葬が行われた大正元年9月の日付と、「大阪御塗師 号洋渡 今村清吉謹製」「非売品」の文字が刷られ、今村洋渡の工房で製作記念に刷られ、頒布されたものと思われる。明治天皇の大葬を記録した写真集や絵はがき等は複数残されるが、白黒の情報が多く、御轎車の色彩について知ることが困難であった。今回、塗師である今村洋渡の工房から頒布された同図の発見により、正確性の高い配色を知ることができる。

白黒ではあるが、明治天皇の轎車製作についての手がかりは『明治天皇御大葬御写真帖』にもある。「明治天皇御轎車図」と比べると御簾のディテールなど数カ所に多少の違いがあるほかは屋台全体の形状や車輪の意匠など、全体に特徴とするべき点では共通している。「轎車と其製作者」と題された頁には、真ん中に轎車の絵が配され、左上には製作者の写真が添えられる。下段には、下記に記す轎車そのものの解説と、轎車を手がけた工人の解説とが右、左に配される。

「図は御大葬当日宮城より青山葬儀場殿まで霊柩を乗せ奉る轎車にして其大きさは長さ二丈三尺九寸五分高さ一丈二尺幅一丈五寸九分。車輪は凡て黒色に塗り直径九尺九寸厚さ八寸なり。進行中は車輪哀音を発して人を蕭然たらしむるものありと云ふ」

「上図は轎車の製作を命ぜられたる工人にして前列中央の老人は支配人上坂宇兵衛 右は受負人岡本由兵衛氏の長男なり」。

「支配人」とは轎車製作に当たったの総指揮者のことであろうか。詳細は不明だが、上坂宇兵衛は写真中央に座ることからも中心的人物であったと目される。そしてその右横の「受負人」、即ち施工作業を請け負ったのが岡本由兵衛の長男だという。写真の人物達が羽織る揃いの法被には「御轎車大工」「京都岡本由」と墨書され、「岡本由」を屋号とする大工集団が手がけたようだ。

また、『明治天皇御大葬御写真帳』中「轎車と其製作者」によると轎車の長さは7メートル以上、高さ・幅は約3メートル以上に及んだようだ。車輪は黒色だとある以外に色や漆塗りに関する文字情報は無いが、別の頁(「大葬鹵簿」)には「夕顔型の御黒塗」「栗色塗の網代」等、色の記載がある。これを「明治天皇御轎車図」と付き合わせると、栗色で表された網代や、黒塗に金の金具を要所に配しているさまが見て取れ、明治天皇の轎車の全体像が少しずつ浮かびあがる。

では今村洋渡と「岡本由」との役割分担はどのようなものであったのか。それを知る手がかりは大正天皇の轎車製作を伝える資料の中にあった。

### 3. 大正天皇の輻車製作について

明治天皇の輻車製作にあたっては初代今村洋渡と二代大橋洋渡の2人が携わったが、大正天皇の輻車が製作された大正二年には初代洋渡は既に亡くなっており、二代洋渡がかつての経験をもとに従事した。地元大阪で編まれた稿末の資料④によると、このとき二代洋渡は従業員数名を従えて東京の宮内省へ出張し、1月15日から27日までかかりきりとなり、31日に納入したとある。

昭和二年二月七日の海外邦字新聞『日米』の号外「奉悼号」（日文研データベース参照）によると、大正天皇の輻車製作の命は京都市岡崎町東天王寺町<sup>ママ</sup>の西村麟太郎（当時39歳）に下された。明治天皇の際の支配人、上坂宇兵衛とは違う人物である。大正天皇崩御の翌日、12月26日のことであったという。当時西村は機械貿易等に従事し、その生業は輻車製作と乖離があるが、記事では西村の先代、七五郎が孝明天皇、英照皇太后、明治天皇、昭憲皇太后の計4台の車を製作していた経緯から同家に声がかかったことを示唆する。ともあれ昭和元年12月26日に連絡を受けた西村は諸事差配し、檜、檜、檜等を京都から宮内省へ運び入れ、年が明けた昭和2年1月2日から製作が開始された。

製作作業を担ったのは、御車大工として岡本由兵衛以下39人、網代師9名、塗師12名、表具師、御晷師、鋳師で、総勢70名余りだったという。またその作業は「昼夜兼業」で従事したとあり、資料④にある「日夜」の「努力」があったとする記述と符合する。翌月に迫った大葬の儀に間に合わせるため、あらゆる工程が大急ぎで実行されたのだろう。大阪から参加した洋渡らの一行は、この「塗師12人」に相当するものと思われる。全体の製作作業は1月2日に開始されており、洋渡らが漆塗りの作業を開始する1月15日迄の間に、車の骨格を作るための大作業が行われたものと推測される。

大正天皇の輻車製作事業の中心は岡本由兵衛率いる御車大工の製作集団であった。これは『明治天皇御大葬御写真帳』で明治天皇の輻車の製作者として「岡本由」の揃いの法被を着た一団が紹介されていることと合致し、明治天皇、大正天皇ともに、御輻車製作の中心は大工である岡本由兵衛らであった。そしてその漆塗りを手がけたのが大阪の初代今村洋渡、二代大橋洋渡であった。資料②にあるように、「御床椽各種御座敷用品、手道具一式」を掲げていたことから、2人の洋渡が率いた工房は、比較的大きな対象物の漆塗を主たる領域としてその家業を成立させていたようである。

【資料編】 ※固有名詞以外は当用漢字に改めている

〔資料①〕『郷土名工並助長奨励功勞者小伝』社団法人大阪府工藝協会、昭和9年（1934年）

漆匠 今村洋渡

嘉永元年兵庫縣神崎郡川邊村の医師の家に生れ、名を清吉と謂ふ。幼にして漆工を志し京都漆匠長貫師<sup>ママ</sup>の門に入り明治八年先代今村平助の養嗣子となる。同二十二年九月より上海、香港、新嘉坡、ペルシャ、スラバヤ、シドニー、メルボルン等に歴遊し同二十四年帰朝して修むる所の技を錬磨す。明治天皇御大葬御輻車塗の御用命を拝し、更に大正三年 照憲皇太后御大葬御車塗御用命輻<sup>ママ</sup>を拝するの光榮に浴せり。大正七年十一月生家に於て歿す。

[資料②]『大阪之工藝』第1巻第1号、大正14年(1925年) 紙面広告頁

祝創刊

御床椽各種御座敷用品、手道具一式

大正元年

大正三年 宮内省御轎車漆匠御用拜命

塗物商 今村洋渡

大阪市西区北堀江六丁目一番地(瓶橋北詰北へ入)

其他御好ニ応ジ製作並ニ各地産漆器販売

[資料③]『大阪之工藝』第2巻第11号、大正15年(1926年) 「会員略伝」項

大阪市西区北堀江通六丁目一番地

漆匠

大橋健吉氏

洋渡と号す。明治二十年一月六日香川県琴平町に生る。香川県琴平工業学校髹漆科卒業して今村洋渡に師事す。大正元年今村家に入家し今村洋渡宮内省御轎車拜命の節共に其轎車の製作に従事す、今村洋渡死後戸籍上の事情あり今村姓を称へざるも名を襲ふて洋渡と称し、今日に至る因に云ふ故今村洋渡は本邦に於ける紫漆の発明者にしてまだ大阪の商工者殊に漆工として海外に渡航するものなき時に於て卒先洋行して欧米を視察し帰朝後之を紀年すべき名を洋渡と改めたるもの也と云ふ。

[資料④]『大阪之工藝』第3巻第21号(昭和2年) 「大阪府工藝協会員の動静」項

一 漆工部会員大橋洋渡氏は豫て 大正天皇の御轎車を塗る為め従業員数名を帯同して宮内省主馬寮出張去る一月十五日より塗に着手し日夜努力の結果二十七日に全部出来、三十一日に宮内省に無事納入せられたる由

註

(1) 現在、愛珠幼稚園(大阪市)では、(公財)文化財建造物保存技術協会により修理に伴う調査が進行中であるが、同会の技術主任・丸石暢彦氏より、和室の床框に今村洋渡等の文字の焼印が確認されたとの速報を教示いただいた。これについては後日報告書にまとめられる予定であり、詳しくはその報告を待ちたいが、床框の塗りを手がけていたことは、資料②にある「御床椽各種御座敷用品」を得意領域として掲げていたことと合致するものであり、今村洋渡工房の仕事を示す作例である可能性が高いと考えられる。

今村洋渡関連年表

元号	西暦	初代洋渡関係事項	二代洋渡関係事項	関連事項
嘉永元年	1848年	今村洋渡（初代洋渡）、兵庫県神崎郡川辺村（現市川町）の医師の家に生まれる。 姓は不詳。名は清吉。		
江戸末～明治初年		京都の漆匠、長貫（佐野長寛か？）に入門。		
明治8年	1875年	今村平助の養嗣子となる。		
明治20年	1887年		1月、香川県琴平町に生まれる。姓は大橋。名は健吉。	
明治22年	1889年	諸外国へ歴遊に立立（9月出発）。		
明治24年	1891年	帰国（これ以降のどこかで洋渡を号しはじめる）。		
明治30～40年代			香川県内の学校（髹漆科）を卒業後、初代洋渡に師事。	
明治45年／大正元年	1912年	明治天皇御大葬御轎車塗を拝命。	今村家に入家。先代洋渡とともに御轎車の製作に従事。	7月30日、明治天皇崩御。
大正3年	1914年	昭憲皇太后御大葬御轎車塗を拝命。	初代洋渡とともに御轎車の製作に従事。	4月9日、昭憲皇太后崩御。
大正7年	1918年	11月、生家にて没。	初代没後、洋渡の名を襲名。	
大正14年	1925年		『大阪之工藝』誌に紙面広告。職種は「塗物商」名は「今村洋渡」。住所は大阪市西区北堀江6丁目1番地。	『大阪之工藝』発刊。
大正15年／昭和元年	1926年		『大阪之工藝』会員略伝に「漆匠」として本名の「大橋健吉」で略伝を記す。この中で初代洋渡が髹漆の発明者であったこと、また、いち早く洋行したことから号を洋渡としたことなどを記す。	12月25日、大正天皇崩御。
昭和2年	1927年		1月15日～27日御轎車の塗りを、従業員数名がかりで実施し、31日に宮内省に納入。	1月4日、大喪儀期日場所が通知（『官報号外』）。 2月7日、8日、大喪儀執り行われる。



図1 明治天皇御輦車図 (個人蔵)

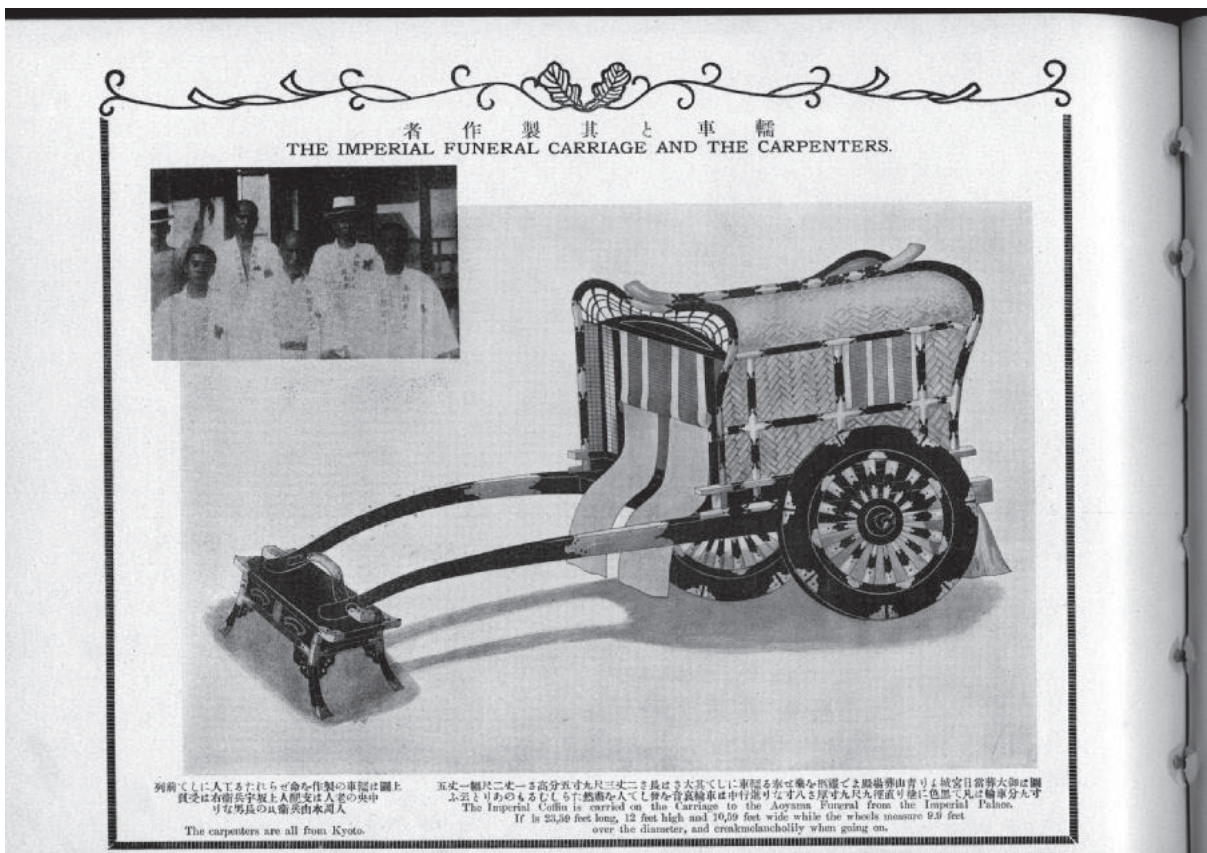


図2 「輦車と其製作者」『明治天皇 御大葬御写真帖』(1912年、新橋堂書店)より転載